異文化接触が異文化受容態度と友人関係に及ぼす影響

泉　水　清　志[1)]・小　池　庸　生[1)]

Influences of Intercultural Contacts in Receptive Attitudes toward Different Cultures and Friendships

Kiyoshi Sensui and Nobuo Koike

Abstract

The purpose of this study was to examine influences of intercultural contacts of modern young people by measuring attitudes towards their own country and others, motivations and satisfactions of friendships. Intercultural contacts were classified into existence of emigrant relatives, foreign friends, foreign classmates, and foreign neighborhoods. Results showed that intercultural contacts promote the relationship and understanding, lower motivations of friendships, and heighten satisfactions of friendships. Intercultural contacts and communication activate the conscious consideration, and receptive attitudes toward different cultures are influenced positively acquirement of identity and amendment of stereotype. On the other side, it is showed that receptive attitudes toward different cultures and satisfactions of friendships are influenced by ambivalent stereotype.

Keywords： intercultural contact, receptive attitudes toward different cultures, friendship, motivation, satisfaction

キーワード：異文化接触，異文化受容態度，友人関係，動機づけ，満足感

１．問　題

１）異文化接触の影響

⑴　異文化接触とコミュニケーション

従来、日本人と外国人の共生や異文化間コミュニケーションを促進するものとして、言語的・非言語的コミュニケーションといった表面的能力が着目されてきた。しかし、異文化との接触によってコミュニケーションを深化させ、真の人間関係を形成するためには、その活動の主体である人間の心的過程に着目することが重要である。それは、自分の感情や意見、態度を相手に伝えて理解してもらい、相手の気持ちを十分に理解するために言葉を用いて表現していく過程である。

異言語話者同士の接触場面では、意識的配慮といった意識面での調整が重要であるとされる。意識的配慮とは、相手と個として向き合い、より深いレベルでの理解を促進しようとする配慮であ

１）育英短期大学現代コミュニケーション学科

り、異文化間コミュニケーションにおいては単なる言語的コミュニケーションよりも重要であるとされる。また、意識的配慮は外国語学習においてその国の文化や習慣、考え方など言語以外の要素を学ぶことを重視する非言語重視型信念によって活性化される。この信念は接触場面での相手との関わり方と関連するため、意識的配慮は相手とどのように関わっていくべきかという認知によって直接的、間接的に影響される。一二三（2006）は、異文化をもっと理解するべきだという信念を持つことが、相手に対する理解を深めようとし、自分の意見を率直に伝えようとする意識的配慮を活性化することを明らかとした。これは、異文化交流における意識的配慮には自他の行動に関する信念が影響を与えることを示すものである。また、相手に対する評価や認知が異文化との交流における自分の行動や相手に求める行動を規定していくことも明らかとした。これは、自他の文化に関する評価や認知が肯定的であるか否定的であるかによって、自分の行動や相手に求める行動に関する信念が影響されることを示唆している。このように、自他の文化に関する評価や認知は自他の行動に関する信念に影響を与えるとともに、異文化との交流にも強く影響を及ぼし、異文化の友人を持つことによって異文化に目を向け、異文化に対する積極的な態度を形成することにつながると考えられる。

今後、日本において多文化化がますます進むことが予測される中で、異文化側のみに一方的に同化や適応を求めるのではなく、異文化やその友人との接触によって自己の内面がどのように変化し、その結果として意識的配慮がどのような影響を受けるのかについて検討することが必要である。また、友人関係のプロセスにはコミュニケーションが大きな役割を果たしているため、異文化との接触においてコミュニケーションを経験することが相手との直接的な関係を決定するだけでなく、他の友人との関係にも影響を及ぼすことが推測される。

⑵　異文化接触とアイデンティティ

アイデンティティは、「自分は何者か」「自分の人生の目的は何か」といった自己を社会の中に位置づける問いかけに対し、肯定的かつ確信的に回答できることで確立される。国際化が進んだ現代では、異文化との接触が増加しているが、人はその接触によって相手との差異に気づかされ、自己が属している社会的カテゴリーを認知していく。すなわち、アイデンティティは自己から生じるだけでなく、自己とは異なる他者との接触によってその意味をもち、多面的な自己を受け入れることで多様なアイデンティティへの理解につながっていくのである。

その一方で、グローバル化によって人やもの、情報が流動的に移動するようになり、周囲の多様な他者の存在が顕在化して自己が所属する社会的カテゴリーの境界があいまいになってきている。つまり、国家や人種、民族など、固定的で限定的に意味づけされてきたものが多様な意味を含むようになり、それとともに人びとのアイデンティティに対する感覚も変化して多様なアイデンティティを承認することが求められてきている。アイデンティティは、他者とのコミュニケーションやその関係で変化するものであり、さらにはそのコミュニケーションを通して変容する可能性をもつため、周囲に多様な文化が存在する現代においては、複数の自己を受け入れることがアイデンティティの確立につながるのである。

アイデンティティは青年期の発達課題とされており、自己アイデンティティの獲得を目指していく中で異文化に接触し、自分自身の国籍や人種に基づく社会的アイデンティティを獲得することは、親密な友人関係の形成や維持にも影響することが推測される。

⑶　異文化接触とステレオタイプ

ステレオタイプとは、型にはまった考え方のことであり、人はステレオタイプを通してものごと

をみるためにその考え方に合うものだけを認知し、合わないものは認知しないようにする傾向がある。異文化と接触する際、人は自己の文化に基づいて定義した文化ステレオタイプに従って情報の取捨選択や構成を行い、自分が納得する情報に合わせてものごとを認知していく。たとえば、「外国籍の人は明るい」といったステレオタイプを持っていた場合、外国籍の人に出会うと「明るい」といった特性に合う行動だけを認知するが、その特性に合わない行動は認知しないため、自分の持っているステレオタイプはますます強固なものになっていく。また、異文化コミュニケーションを理解する際、「日本人は集団主義的」で「欧米人は個人主義的」のような二項対立概念を用いて文化を比較することが多いが、異文化接触前にこのような概念や知識を持つことは相手の多様性を見過ごすだけでなく、相手の言動や行動の原因をこの概念や知識に帰属してしまうため、ステレオタイプを助長することにもつながる。

ある集団に対するステレオタイプは、その集団に対する認知のバイアスにつながることが多く、特にマイノリティに対して否定的なステレオタイプが形成されやすい。このステレオタイプは、マイノリティとその望ましくない行動を実際以上に関連すると錯覚してしまう錯誤相関によって生じるとされている。つまり、社会においてマイノリティは目立ちやすく、人の望ましくない行動も目立ちやすいため、実際にはその生起頻度が低いのにもかかわらず相関が高いと思われやすいのである。このようなマイノリティへの否定的なステレオタイプは、偏見や差別、先入観につながりやすい。

一方、Fisk ら（2002）は、対象となる集団と認知する側の集団の社会構造関係に応じて体系的にステレオタイプの内容が規定されると考え、ステレオタイプ内容モデルを提唱した。このモデルでは、社会経済的地位の高低と相互依存性（協力関係・競争関係）の２次元から対象集団を社会経済的地位が高く協力関係にある集団、地位が高く競争関係にある集団、地位が低く協力関係にある集団、地位が低く競争関係にある集団の４つに類型化し、感情や行動が決定されるとしている。また、このモデルではステレオタイプの特徴として次の２つが指摘されている。１つは、あるカテゴリー集団に対するイメージは相対的なものであり、本来備わっている特性を反映しているのではないということである。集団間の関係は時代や社会情勢によって変化するため、同一集団でも状況が変わればまったく異なるイメージが付与されることになる。もう１つは、能力とあたたかさの次元で評価が相反するアンビバレント・ステレオタイプが存在し、独特の偏見が形成されるということである。従来のステレオタイプでは、偏見や差別の対象とされてきた集団はいずれの次元でも否定的評価を受けている集団であることが多かった。しかし、現代社会ではそのような集団は減少し、次元によって両価的な評価をされる集団が存在するようになってきている。このアンビバレント・ステレオタイプは既存の社会慣行や制度を正当化し、人びとの視線を現実世界の不条理や不平等からそらす機能をもっている。たとえば、「貧しくても幸せな人」や「裕福だが幸せではない人」といった相補的ステレオタイプにあう事例が知覚されると、貧富の差から生じる公平な世界観への脅威が緩和され、現行の社会システムが正当化されるのである。

このように、ステレオタイプは人の認知や態度、行動に大きく影響を及ぼし、集団に対する偏見や差別にもつながる可能性をもつ。その一方で、現代では従来とは異なるステレオタイプが存在し、独特の偏見が形成されている。異文化との接触はステレオタイプを形成し、強化するため、異文化への態度や行動に大きく影響するとともに、友人関係をはじめとした他者との関係にも影響を及ぼすことが推測される。

⑷　異文化接触と異文化受容態度

国際化や他文化共生が進む現代の日本では、周

囲に存在するさまざまな人や文化がわれわれの生活に与える影響がますます大きくなってきている。多くの国々では、異文化の人や文化が摩擦や葛藤を生み出し、民族間や宗教間での紛争にもつながっている。そのため、これからの日本において異文化とより友好的に共生することや異文化を受容していくことは、重要な課題の１つである。

異文化が混在し、国際化が進んだ環境は、人々の異文化接触の機会を高めるだけでなく、異文化理解の機会にもつながるため、異文化や外国人に好意的であり、積極的に関ろうとする異文化受容態度を促進するとされている(渡部・金児，2004)。その一方で、異文化受容態度の促進には単純に国際化が進むということだけでなく、他のさまざまな要因が影響することも指摘されている(向井ら，2006)。たとえば、多くの異文化が混在する都市に育った人は、異文化受容態度を示すことが自尊心を高めるために高い異文化受容態度を示し、また自尊心が高い人は自尊心が低い人よりも異文化に対して受容的であり、愛国心が強い。愛国心に関しては、強い愛国心は自尊心の高揚につながるために間接的には異文化受容態度を促進する一方で、異文化への否定的な態度を強めるために排他的な自文化中心主義へと陥りやすいともいわれている。さらに、国際化のより進んだ地域では日常生活の中に外国人との付き合いが含まれるため、地域活動や近所づきあいに積極的であることが異文化受容態度に正の影響を与えることも示されている。

現代の日本は国際化や多文化共生が進んでおり、異文化受容態度がますます促進していくと思われる。従来、日本における異文化の存在や外国人は想定上のみの存在であったり日本に適応して暮らす存在であったりするため、日本人は外国人へ日本への同化を求める傾向が強いことや、日本文化はものや習慣、芸術などを外から取り入れ、それをアレンジすることで発展してきたことも指摘されている(天野，1997)。このような日本の歴史や文化の特性からも、異文化との接触が異文化受容態度を促進することにつながることが推測される。

２）青年期の友人関係と異文化接触

青年期における「自己概念の獲得」と「親密な友人関係」には密接な関わりがあり、同性の親友像が自己像のモデルになることによって、現実と理想の自己像を獲得し、それらを比較することで自己評価を行うといわれている(岡田，1999)。友人関係は青年の社会化に影響を及ぼし、その機能として「安定化」「社会的スキルの学習」「モデル」があるといわれている（松井，1990)。「安定化」とは自我を支え得る機能、「社会的スキルの学習」とは他者と良い関係を構築するための接し方を学習する機能、そして「モデル」とは自己の人生観や価値観を広げ友人をモデルにする機能である。また、親しい友人とは「安心」を中心とした信頼関係を形成して、自己の自律を支え、アイデンティティの達成を促進するとされている(水野，2004)。さらに、友人関係の満足感はストレスコーピングと関連し、「ポジティブ関係コーピング」と「解決先送りコーピング」はポジティブな影響を及ぼすのに対し、「ネガティブ関係コーピング」はネガティブな影響を及ぼすとされている(加藤，2001)。

友人関係の発達的な変化は、以下のようにまとめられる。同性の友人とは、加齢に伴って自己開示して積極的に相互理解しようとする傾向が強まり、多くの他者との同調傾向は減少していく。初期には「浅く広い」関係が多くみられるが、加齢に伴って「深く広い」関係から「深く狭い」関係へと移行していく。この関係には性差がみられ、男子は友人と自分は異なる存在であるという認識から、心理的距離のある互いに分離した関係を持つのに対し、女子は相手を理解し共感して共鳴し合うといった同一関係を望み、互いの個別性の自覚が薄い、密着した関係を持つ。友人関係が外的な動機づけではなく、自発的に行動されるという

自己決定的なものであればあるほど、友人への向社会的行動の生起頻度は高くなることが示されている(岡田，2005)。この傾向は女性よりも男性に強くみられ、その理由として、男性が「同一化」による動機づけが向社会的行動には必要であることがあげられる。

現代における青年の友人関係は、「希薄化」や「表面化」といった特徴があると指摘されている。人間関係の開始や維持には「自己開示」が大きな役割を果たしており、「自己開示の返報性」が人間関係の発展に関連するとされている。しかし、現代青年は、自分自身の内面を開示するような関わり方を避け、表面的な楽しさの中で群れて関係の深まりを避ける傾向にあり、「群れ」「気遣い」「ふれあい回避」の3因子が岡田（1995）により報告されている。また、現代青年の友人関係が「希薄化」しているのではなく、場面に応じて選択的に使い分けているという指摘もある(福重，2007)。つまり、表面的な関わり行動の一面である「希薄」なものと積極的な関わり行動の一面である「親密」なものが混在しているのである。これは、友人関係の深さと自己開示の深さがあまり関連しなくなってきていることを示しており、関係を維持する機会が多様になったために「友人」カテゴリーが拡大したことと、関係の質的差異や文脈によって付き合い方を選択的に使い分けるようになったことがその理由とされている（福重，2007；辻，1999)。

泉水・小池（2011ａ）は、友人関係の特徴、動機づけ、満足感、親友に対する態度について調査し、現代青年の友人関係に及ぼす要因について次の4つにまとめている。第1に、友人関係の特徴として、「相手に気を使う」「傷つけないようにする」などの「気遣い」と、「冗談を言って笑わせる」「楽しくなるように気を使う」などの「群れ」の傾向があることが確認されたものの、「真剣に話し合う」「心を打ち明ける」などの「ふれあい回避」傾向は低いことが明らかになり、友人関係が希薄化しているのではなく、「希薄」と「親密」が混在するとしている。第2に、友人関係の動機づけでは、「一緒にいるのが楽しい」「親しくなるのが嬉しい」などの「内発」と、「意味のあるものである」「重要なことである」などの「同一化」が高いことが示され、友人関係が自己決定的な動機づけから生じるとしている。自己決定的な動機づけは、男性の向社会的行動に大きく影響を及ぼすとされてきたが、女性においても強く働いていることが明らかとされ、普段の生活の中で友人と多くの活動を共有することによって「同一化」による動機づけが生じ、向社会的行動が生起することが示唆された。第3に、友人関係への満足感では、「自分を理解してくれている」「親友と呼べる」友人から高い満足感を得ていて、今の友人の存在自体に満足している一方で、自分が「誰からも好かれている」とは感じておらず、友人全員からは好意的に思われていないと感じているとしている。第4に、親友に対する態度では、親友としての相手自身の状況については大切に考えているが、自分との関係になると意外と冷静に判断している。一方で、親友は相手と自分との関係で参考になる人であると考えているが、第3者との関わりの中ではあまり評価をしていないとしている。また、青年期女性は同性である親友に対して好意的な感情をやや高く持っており、青年期男性のデータとの比較、検討が必要であることも示している。

泉水・小池（2011ｂ）は、異文化接触と友人関係について調査し、友人関係尺度に関しては、「群れ」「他者配慮」「笑い」「プライバシー」「気遣い」の5因子が得られ、相手への「気遣い」に加えて、他者や集団への「配慮」、お互いの「プライバシー」を重視する傾向がみられた。異文化接触に関しては、「親族の移民経験」「外国籍の友人・同じクラスの経験・近隣在住」に分け、これらの有無によって友人関係尺度に違いがみられるかどうかを検討した。その結果、「笑い」因子については異文化接触がある場合はない場合よりも高いことが分か

り、現代青年の友人関係は「気遣い」することは当然であり、同時にコミュニケーションの中に「笑い」を重視していること、それから他者との「群れ」によってその関係を形成、維持していこうとしていると思われた。このことから、「冗談を言って相手を笑わせる」や「ウケるようなことをよくする」といった「笑い」が異文化コミュニケーションに重要であることを認識し、関係に生かしていこうとしていることが推測された。

3）本研究の目的

以上のことから、国際化や多文化共生が進む今後の日本において異文化との接触が増加し、異文化への態度に影響していくことは明らかであり、異文化とのコミュニケーションやアイデンティティの獲得、ステレオタイプ的認知などさまざまな要因が関連することが推測される。また、異文化との接触は異文化やその人びとへの態度や行動だけでなく、そこで形成された認知や態度が友人関係にも影響することが考えられる。

本研究は、親族移民の有無、外国籍の友人の有無、外国籍との同クラス経験の有無、外国籍の近隣住民の有無といった異文化との接触が異文化受容態度に及ぼす影響について検討するとともに、友人関係への動機づけや満足感への影響について検討することを目的とした。

2．方　法

1）調査対象者：大学生・短期大学生346名（男子42名、女子304名、平均年齢18.9歳）

2）調査内容・項目

⑴　異文化への態度：自国と外国への態度尺度（向井ら，2003）25項目（表１）について、「非常にあてはまる⑸」から「全くあてはまらない⑴」まで、５件法で回答を求めた。

⑵　友人関係への動機づけ：友人関係への動機づけ尺度（岡田，2005）16項目について、「非常にあてはまる⑸」から「全くあてはまらない⑴」まで、５件法で回答を求めた。なお、下位尺度ごとの具体的な項目は以下の通りである。

①　外的
- 一緒にいないと友人が怒る。
- 親しくしていないと、友人ががっかりする。
- 友人関係を作っておくように、まわりから言われる。
- 友人の方から話しかける。

②　取り入れ
- 友人がいないと、後で困る。
- 友人がいないと不安である。
- 友人がいないのは、恥ずかしいことである。
- 友人とは親しくしておくべきである。

③　同一化
- 友人と一緒に時間を過ごすのは、重要なことである。
- 友人関係は、自分にとって意味のあるものである。
- 友人といることで、幸せになれる。
- 友人のことをよく知るのは、価値のあることである。

④　内発
- 友人と話すのは、おもしろい。
- 友人と一緒にいると、楽しい時間が多い。
- 友人と一緒にいるのは楽しい。
- 友人と親しくなるのは、うれしい。

⑶　友人への満足感：友人満足感尺度（加藤，2001）６項目について、「非常にあてはまる⑸」から「全くあてはまらない⑴」まで、５件法で回答を求めた。なお、具体的な項目は以下の通りである。
- 周囲の人たちに受け入れられていると感じる。
- 私は、友だちととても気持ちが通じ合っ

ている。

・自分を本当に理解してくれる人がいる。

・心から親友と呼べる友人がいる。

・誰からも好かれていると感じる。

・自分を支持してくれる人がいる。

(4) フェイスシート項目：所属学科、学年、性別、年齢

(5) 異文化接触の経験

① 親族の移民の有無

② 外国籍の友人の有無

③ 外国籍との同クラス経験の有無

④ 外国籍の近隣住民の有無

3）**調査時期**：2010年７月～12月に実施した。

3．結　果

1）異文化受容態度

表１は、自国と外国への態度尺度について、主因子法による因子分析を行った結果をまとめたものである。プロマックス回転後、因子の絶対値が

表１　自国と外国への態度尺度因子分析結果

項　　目	積極的関与	愛国心	外国人拒否	異文化援助
21．異なる民族の友人がたくさんほしい。	**0.86**	−0.17	0.19	−0.04
17．外国の人と付き合うと視野が広がるのでよいと思う。	**0.77**	0.09	−0.04	−0.18
9．他の民族の文化をもっとよく知りたい。	**0.76**	−0.07	0.04	0.06
3．異なる民族の人びとともっと深く付き合いたい。	**0.71**	−0.04	0.07	0.13
18．日本は諸外国から学ぶことが多い。	**0.71**	0.14	−0.13	−0.24
22．外国の文化を積極的に取り入れることは、日本にとって良いことである。	**0.64**	−0.11	0.09	0.14
13．外国の人とは、文化が違ってはじめは分かり合えなくても、あきらめずに分かり合えるまで努力したい。	**0.61**	0.10	−0.07	0.26
12．日本の文化と外国の文化の両方を同じように尊重していかなければならない。	**0.54**	0.11	−0.04	0.13
8．もっと日本人はいろいろな部分で外国の人を受け入れていかなければならない。	**0.53**	−0.10	−0.03	0.21
19．私は日本人であることを誇りに思う。	0.12	**0.84**	−0.02	−0.03
15．私は、日本という国が好きだ。	0.00	**0.77**	−0.18	0.03
10．生まれ変わるとしたら、また日本人に生まれたい。	−0.22	**0.57**	0.02	0.09
25．物価の安い外国で暮らすより、少々高くても日本に暮らしたい。	−0.04	**0.53**	0.17	0.03
1．日本は世界で一番良い国である。	−0.10	**0.47**	0.19	0.11
24．日本人は優れた民族である。	0.13	**0.44**	0.35	−0.02
20．外国の人が日本で働く場合には、特定の職種に限定するほうがよい。	−0.03	−0.05	**0.71**	0.13
23．外国の人の住む地域を限定したほうが、社会の秩序を保てると思う。	−0.05	0.05	**0.69**	0.17
14．日本の会社では、外国の人を管理職にしないほうがうまくいくと思う。	0.46	−0.07	**0.57**	0.00
11．日本が戦後驚くほどの経済成長をとげたのは、国民が優秀だからだ。	0.06	0.18	**0.51**	0.05
7．長く日本に住んでいても、外国の人には日本人と同じ権利がないのは仕方がない。	−0.07	0.12	**0.49**	−0.23
4．海外援助をするなら、日本の利益にならないような援助はすべきではない。	−0.03	−0.13	**0.46**	−0.36
2．日本の利益にならなくても、苦しんでいる国々にはすすんで富を分けるべきだ。	0.16	0.08	0.09	**0.59**
5．*もし引っ越すなら、他の条件がよくても外国の人がたくさん住んでいるような地域は避けたい。*	−0.36	0.05	0.29	0.03
6．*日本の経済力を考えれば、外国に対して日本はもっと強く発言してもよい。*	0.24	0.05	0.32	−0.09
16．*世界の貧しい国の生活を良くするために、私たちの生活を切りつめようとは思わない。*	0.03	−0.02	0.36	−0.33
24．*日本人は優れた民族である。*	0.13	0.44	0.35	−0.02

0.4以上の因子負荷量をもつ項目について解釈を行った結果、「積極的関与」「愛国心」「外国人拒否」「異文化援助」の4因子を得た。

表2は、自国と外国への態度尺度得点について、異文化接触の有無と因子ごとに平均値と標準偏差(SD)をまとめたものである。2(接触の有無)×4(因子)の分散分析を行った結果、因子の主効果に有意差がみられた($F(3,1376)=189.49$, $p<.001$)。下位分析の結果、「外国人拒否」よりも「積極的関与」「愛国心」「異文化援助」が高く、「愛国心」より「積極的関与」が高いことが明らかとなった。

表3は、異文化接触を親族の移民の有無、外国籍の友人の有無、外国籍との同クラス経験の有無、外国籍の近隣住民の有無に分け、因子ごとの平均値と標準偏差をまとめたものである。それぞれの態度尺度得点について2(接触の有無)×4(因子)の分散分析を行った結果、親族移民の有無では因子の主効果($F(3,1376)=63.35$, $p<.001$)、外国籍の友人の有無では因子の主効果($F(3,1376)=153.22$, $p<.001$)と交互作用($F(3,1376)=5.79$, $p<.001$)、外国籍との同クラス経験の有無では因子の主効果($F(3,1376)=185.77$, $p<.001$)、外国籍の近隣住民の有無では因子の主効果(F

表2　自国と外国への態度尺度平均

		因子				
		積極的関与	愛国心	外国人拒否	異文化援助	計
接触あり	平均値	4.05	3.73	2.78	3.89	3.61
	(SD)	(0.66)	(0.74)	(0.71)	(0.96)	(0.92)
接触なし	平均値	3.88	3.78	2.80	3.92	3.59
	(SD)	(0.63)	(0.69)	(0.50)	(0.77)	(0.80)
計	平均値	3.97	3.76	2.79	3.91	3.60
	(SD)	(0.65)	(0.72)	(0.63)	(0.88)	(0.87)

表3　異文化接触の種類による自国と外国への態度尺度平均

		因子				
		積極的関与	愛国心	外国人拒否	異文化援助	計
親族移民あり	平均値	3.94	3.68	2.88	3.75	3.56
	(SD)	(0.64)	(0.76)	(0.79)	(1.13)	(0.94)
親族移民なし	平均値	3.92	3.79	2.78	3.94	3.61
	(SD)	(0.66)	(0.72)	(0.61)	(0.85)	(0.86)
外国籍友人あり	平均値	4.23	3.71	2.71	3.96	3.65
	(SD)	(0.56)	(0.75)	(0.73)	(0.81)	(0.92)
外国籍友人なし	平均値	3.84	3.80	2.81	3.90	3.59
	(SD)	(0.65)	(0.71)	(0.6)	(0.9)	(0.85)
外国籍同クラスあり	平均値	3.95	3.82	2.84	3.91	3.63
	(SD)	(0.67)	(0.77)	(0.73)	(0.93)	(0.9)
外国籍同クラスなし	平均値	3.90	3.75	2.76	3.92	3.58
	(SD)	(0.64)	(0.69)	(0.55)	(0.85)	(0.84)
外国籍近隣住民あり	平均値	4.08	3.71	2.69	3.96	3.61
	(SD)	(0.67)	(0.7)	(0.67)	(0.95)	(0.93)
外国籍近隣住民なし	平均値	3.89	3.79	2.81	3.91	3.60
	(SD)	(0.65)	(0.72)	(0.62)	(0.87)	(0.86)

(3,1376)＝112.47，p＜.001）に有意差がみられた。下位分析の結果、すべての異文化接触において「外国人拒否」よりも「積極的関与」「愛国心」「異文化援助」が高く、「愛国心」より「積極的関与」が高いことが明らかとなった。また、外国籍の友人の有無では、「積極的関与」において外国籍の友人がいるほうがいないよりも態度得点が高いことが明らかとなった。

2）友人関係への動機づけ

表4は、友人関係の動機づけ得点について、異文化接触の有無と下位尺度（「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」）ごとに平均値と標準偏差をまとめたものである。2（接触の有無）×4（下位尺度）の分散分析を行った結果、因子の主効果に有意差がみられた（F(3,1376)＝449.04，p＜.001）。下位分析の結果、「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」の順に高いことが明らかとなった。

表5は、異文化接触を親族の移民の有無、外国籍の友人の有無、外国籍との同クラス経験の有無、外国籍の近隣住民の有無に分け、下位尺度ごとの平均値と標準偏差をまとめたものである。それぞれの友人関係への動機づけ尺度得点について、2（接触の有無）×4（下位尺度）の分散分析を行っ

表4　友人関係への動機づけ尺度平均

		因子				
		外的	取り入れ	同一化	内発	計
接触あり	平均値	2.83	3.62	4.30	4.56	3.83
	(SD)	(0.65)	(0.78)	(0.64)	(0.55)	(0.94)
接触なし	平均値	2.86	3.78	4.27	4.55	3.86
	(SD)	(0.67)	(0.72)	(0.66)	(0.56)	(0.92)
計	平均値	2.84	3.69	4.29	4.56	3.84
	(SD)	(0.65)	(0.76)	(0.65)	(0.56)	(0.93)

表5　異文化接触の種類による友人関係への動機づけ尺度平均

		因子				
		外的	取り入れ	同一化	内発	計
親族移民あり	平均値	2.76	3.63	4.15	4.49	3.76
	(SD)	(0.64)	(0.82)	(0.81)	(0.57)	(0.97)
親族移民なし	平均値	2.85	3.70	4.30	4.57	3.85
	(SD)	(0.66)	(0.75)	(0.63)	(0.56)	(0.93)
外国籍友人あり	平均値	2.79	3.51	4.28	4.54	3.78
	(SD)	(0.64)	(0.83)	(0.68)	(0.61)	(0.98)
外国籍友人なし	平均値	2.86	3.74	4.29	4.57	3.86
	(SD)	(0.66)	(0.73)	(0.64)	(0.55)	(0.92)
外国籍同クラスあり	平均値	2.80	3.61	4.28	4.54	3.81
	(SD)	(0.64)	(0.79)	(0.66)	(0.56)	(0.95)
外国籍同クラスなし	平均値	2.87	3.74	4.29	4.57	3.87
	(SD)	(0.66)	(0.73)	(0.65)	(0.56)	(0.92)
外国籍近隣住民あり	平均値	2.76	3.54	4.19	4.49	3.74
	(SD)	(0.66)	(0.79)	(0.55)	(0.56)	(0.93)
外国籍近隣住民なし	平均値	2.86	3.72	4.30	4.57	3.86
	(SD)	(0.65)	(0.75)	(0.67)	(0.56)	(0.93)

た結果、親族移民の有無では親族移民の主効果（$F(3,1376)=2.91$，$p<.1$）と因子の主効果（$F(3,1376)=169.36$，$p<.001$）、外国籍の友人の有無では友人の主効果（$F(3,1376)=3.71$，$p<.1$）と因子の主効果（$F(3,1376)=322.57$，$p<.001$）、外国籍との同クラス経験の有無では同クラス経験の主効果（$F(3,1376)=2.93$，$p<.1$）と因子の主効果（$F(3,1376)=446.51$，$p<.001$）、外国籍の近隣住民の有無では近隣住民の主効果（$F(3,1376)=5.63$，$p<.05$）と因子の主効果（$F(3,1376)=236.93$，$p<.001$）に有意差または有意な傾向がみられた。下位分析の結果、すべての異文化接触において異文化接触がないほうがあるよりも友人関係への動機づけが高く、「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」の順に高いことが明らかとなった。

3）友人関係への満足感

表6は友人関係への満足感について、異文化接触の有無ごとに平均値と標準偏差をまとめたものである。2（接触の有無）×6（項目）の分散分析を行った結果、項目の主効果に有意差がみられた（$F(5,2063)=145.42$，$p<.001$）。下位分析の結果、「親友の存在」「友人からの理解」「友人からの受容」「気持ちの通じ合い」「友人からの支持」「友人全員からの好意」の順に高いことが明らかとなった。

表7は、異文化接触を親族の移民の有無、外国籍の友人の有無、外国籍との同クラス経験の有無、外国籍の近隣住民の有無に分け、項目ごとの平均値と標準偏差をまとめたものである。それぞれの友人関係への満足度尺度得点について、2（接触の有無）×6（項目）の分散分析を行った結果、親族移民の有無では項目の主効果（$F(5,2063)=58.40$，$p<.001$）、外国籍の友人の有無では友人の主効果（$F(5,2063)=3.08$，$p<.1$）と項目の主効果（$F(5,2063)=102.11$，$p<.001$）、外国籍との同クラス経験の有無では同クラス経験の主効果（$F(5,2063)=3.69$，$p<.1$）と因子の主効果（$F(5,2063)=144.79$，$p<.001$）、外国籍の近隣住民の有無では近隣住民の主効果（$F(5,2063)=4.48$，$p<.05$）と因子の主効果（$F(5,2063)=83.17$，$p<.001$）に有意差または有意な傾向がみられた。下位分析の結果、すべての異文化接触において「親友の存在」「友人からの理解」「友人からの受容」「気持ちの通じ合い」「友人からの支持」「友人全員からの好意」の順に高いことが明らかとなった。また、外国籍の友人がいるほうがいないよりも友人関係への満足感が高いのに対し、外国籍との同クラス経験や近隣住民の存在がいるほうがいないよりも友人関係への満足感が低いことが明らかとなった。

表6　友人関係への満足感尺度平均

		項目						
		友人からの受容	気持ちの通じ合い	友人からの理解	親友の存在	友人全員からの好意	友人からの支持	計
接触あり	平均値	3.76	3.67	4.17	4.31	2.66	3.55	3.69
	(SD)	(0.87)	(0.81)	(0.96)	(0.91)	(0.87)	(0.88)	(1.03)
接触なし	平均値	3.83	3.72	4.18	4.27	2.81	3.52	3.72
	(SD)	(0.72)	(0.72)	(0.89)	(0.9)	(0.79)	(0.78)	(0.94)
計	平均値	3.79	3.69	4.17	4.29	2.72	3.54	3.7
	(SD)	(0.81)	(0.77)	(0.93)	(0.90)	(0.84)	(0.83)	(0.99)

表７　異文化接触の種類による友人関係への満足感尺度平均

		項　　目						
		友人からの受容	気持ちの通じ合い	友人からの理解	親友の存在	友人全員からの好意	友人からの支持	計
親族移民あり	平均値	3.61	3.72	4.06	4.31	2.58	3.58	3.64
	(SD)	(1.02)	(0.88)	(0.98)	(0.86)	(0.84)	(0.81)	(1.04)
親族移民なし	平均値	3.81	3.69	4.19	4.29	2.74	3.54	3.71
	(SD)	(0.78)	(0.76)	(0.93)	(0.91)	(0.84)	(0.84)	(0.98)
外国籍友人あり	平均値	3.93	3.83	4.13	4.32	2.72	3.65	3.76
	(SD)	(0.83)	(0.78)	(1.11)	(1.00)	(0.86)	(0.92)	(1.05)
外国籍友人なし	平均値	3.75	3.65	4.18	4.29	2.72	3.51	3.69
	(SD)	(0.80)	(0.76)	(0.88)	(0.87)	(0.84)	(0.81)	(0.97)
外国籍同クラスあり	平均値	3.73	3.65	4.13	4.27	2.69	3.49	3.66
	(SD)	(0.86)	(0.80)	(0.96)	(0.92)	(0.86)	(0.84)	(1.01)
外国籍同クラスなし	平均値	3.83	3.72	4.2	4.31	2.74	3.58	3.73
	(SD)	(0.77)	(0.75)	(0.91)	(0.89)	(0.83)	(0.83)	(0.98)
外国籍近隣住民あり	平均値	3.54	3.67	4.06	4.37	2.56	3.46	3.61
	(SD)	(0.87)	(0.71)	(1.02)	(0.82)	(0.83)	(0.94)	(1.03)
外国籍近隣住民なし	平均値	3.84	3.7	4.19	4.28	2.75	3.55	3.72
	(SD)	(0.78)	(0.78)	(0.92)	(0.92)	(0.84)	(0.82)	(0.98)

4．考　察

1）異文化受容態度

自国と外国への態度尺度について、主因子法による因子分析を行った結果、「積極的関与」「愛国心」「外国人拒否」「異文化援助」の４つの因子が得られた。その４因子の平均値について、２（接触の有無）×４（因子）の分散分析を行った結果、因子の主効果に有意差がみられ、「外国人拒否」よりも「積極的関与」「愛国心」「異文化援助」が高く、「愛国心」より「積極的関与」が高いことが明らかとなった。また、異文化接触の種類ごとに分散分析を行った結果、すべての異文化接触において同様の結果が得られた。このことから、異文化接触が異文化との関係や理解に対する積極的な関わりを促進させると同時に、日本や日本人のイメージを高めることが考えられた。

この結果は、国際化の進んだ環境に居住することによって異文化受容態度が促進されることを証明しているといえる。表２より、「異なる民族の友人がたくさんほしい」や「異なる民族の人びととともっと深く付き合いたい」といった「積極的関与」の因子が他の因子よりも高いことが明らかであり、異文化やそれをもつ人に好意的な感情をもち、積極的に関与しようとする態度を異文化接触が促進することが考えられる。また、「日本は世界で一

番良い国である」や「日本人は優れた民族である」といった「愛国心」よりも「他の民族の文化をもっとよく知りたい」や「外国の人と付き合うと視野が広がるのでよいと思う」といった「積極的関与」が高いことも、異文化との接触が自己にポジティブな影響を与え、その成長につながることを認知しているともいえよう。日本文化はものや習慣、芸術などを外から取り入れてアレンジすることで発展してきたといわれているが(天野，1997)、日本における異文化に対する好意的で積極的な態度や認知は、この日本文化の特徴が影響しているのではないだろうか。

現代青年は、幼い頃から国際化や多文化共生の進んだ中で生活しているため、異文化との接触が自己の認知や行動にプラスに働いたことをこれまでに経験しており、異文化に対するポジティブな態度が養われていることも考えられる。また、青年期はアイデンティティの獲得を目指している時期であるため、異文化をもつ他者と接触することで相手との違いに気づき、自己が属している社会的アイデンティティを認知し、多様な自己アイデンティティの獲得につながっていることも、異文化に対するポジティブな認知や態度の形成に影響しているのではないか。さらに、われわれは「他者を公平に扱うべきである」や「人を差別するべきではない」いう教育を受け、社会にもそのような規範が存在しているため、異文化との接触においても同文化と同様か、またはそれ以上の積極的な関わりをもつことを心がけると推測される。そのため、異文化との接触によって「自分は公平な人間である」という自己概念やアイデンティティを確認するだけでなく、「異文化と接するのは良いことである」や「異文化を自己の中に取り入れることは良いことである」といった認知が生み出され、異文化受容に対する積極的な態度が促進するのであろう。

一方で、本研究の結果から「積極的関与」とともに「異文化援助」や「愛国心」も高いことが明らかとなった。このことは、アンビバレント・ステレオタイプが存在している可能性を示唆している。アンビバレント・ステレオタイプとは、あたたかさと能力の次元で評価が相反するステレオタイプであり、この2つの次元以外でも両価的な評価が集団や他者に対して存在することが推測される。異文化との接触によって、「日本は諸外国から学ぶことが多い」や「日本の文化と外国の文化の両方を同じように尊重していかなければならない」といった「積極的関与」の中の肯定的な態度と同時に、「日本は世界で一番良い国である」や「日本人は優れた民族である」といった「愛国心」や、「日本の利益にならなくても苦しんでいる国々には進んで富を分けるべきだ」といった「異文化援助」が高まるのは、「異文化やその人びとは良い」が「日本文化や日本人のほうが優れており、異文化の人を助けてあげなければならない」という認知が存在しているとも考えられる。上述したように、われわれは公平な世界観をもち、そのような社会規範の中で生活しているが、現実社会には異文化へのさまざまな不公平や偏見、差別が存在している。異文化に対してアンビバレント・ステレオタイプをもつことで、このような公平な世界観を脅かす状況から視線をそらそうとしているのではないだろうか。

因子の主効果以外では、外国籍の友人の有無において交互作用がみられ、「積極的関与」において外国籍の友人がいるほうがいないよりも特に高いことが明らかとなった。他の異文化接触に比べ、友人として異文化と関わる場合には表面的な関係ではなく、より親密で内面的な関係をもつことが必要であり、異文化接触の影響はより大きく、具体的に実感される。友人としての関係を維持して発展させるために、相手やその文化をより理解し、自分の意見も率直に伝えようとしてコミュニケーションが促進され、意識的配慮が活性化される。また、自分と身近な他者との比較を行うことで自己概念やアイデンティティを獲得していくが、異

文化の友人との親密な関係は社会的アイデンティティの認知を促進させるため、多面的で多様な自己やアイデンティティを受容し、理解することにもつながる。異文化との友人関係は、自己にとってこのようなポジティブな影響を及ぼすため、積極的な関与への動機づけを高めると同時に、異文化に対して積極的に関与することが異文化の友人を形成することにもなるのであろう。

2）友人関係への動機づけ

友人関係の動機づけについて、2（接触の有無）×4（下位尺度）の分散分析を行った結果、因子の主効果に有意差がみられ、「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」の順に高いことが明らかとなった。また、異文化接触の種類ごとに分散分析を行った結果、すべての異文化接触において同様の結果がみられた。このことから、友人関係の形成、維持においては、「話すのがおもしろく、一緒にいるのが楽しい」や「一緒に時間を過ごすのは重要で、自分にとって意味がある」といった動機が高いのに対し、「まわりから大切と言われるし、友人ががっかりする」や「不安だし、恥ずかしい」といった動機は低いことが分かった。

「内発」が友人関係の動機づけとして高かったのは、現代青年は友人とのコミュニケーションにおいて「笑い」を重視し、他者との「群れ」によってその関係を形成し、維持しようとしている（泉水・小池，2011ｂ）ことを証明しているといえる。接触の初期において、人は相手と今後どのような関係を形成し、維持していくかを予測し、それが実際の関係にも影響する。友人関係においても同様に、相手との関係を成立させた後にどのような形で維持し、過ごしていきたいかを予測するため、それが動機づけに影響していく。本研究の結果から、現代の青年は「おもしろい友人と楽しい時間を一緒に過ごす」ことを予測し、そのような友人との関係を重視するのであろう。また、「同一化」も動機づけとして高かったのは、青年期の課題であるアイデンティティの獲得が影響していると思われる。友人と一緒に時間を過ごし、密接な関係を築くことで個人では分からなかった多様な自己に気づくことができる。友人関係を通した相手との同一化が自己アイデンティティの獲得にポジティブな影響を与えているため、その動機づけも高くなるのであろう。

これに対し、「外的」や「取り入れ」が友人関係への動機づけとして低かったのは、友人関係における独自の価値観をもっていることが影響しているのではないか。現代青年の友人関係は、全体的に希薄化しているのではなく、希薄な部分と親密な部分が混在しているといわれている（泉水・小池，2011ａ）。また、今日の友人の捉え方やその関係は常に変化し続けている。さらに、国際化や多文化共生が進んだことで、周囲にはさまざまな特徴をもった他者が存在するようになってきている。そのため、自己や他者について画一的な認知や態度をもつ必要性がなくなり、「周囲からどのようにみられるか」ではなく、「自分が誰と付き合いたいか」によって友人関係を選択し、形成しているのではないだろうか。このことは、多様な他者を肯定的に受け入れることにつながり、集団や他者に対するステレオタイプや認知的バイアスから生じる差別や偏見を減少させることも予測されるため、友人関係にポジティブな影響を及ぼしているともいえよう。しかし、青年期においては他者からみられている自分を認知することで社会的自己を取り入れ、身近な友人と比較することで自己概念やアイデンティティを獲得していく。周囲からの認知や評価ではなく、自分独自の価値観を重視して友人関係を形成していくことは、自己概念やアイデンティティの獲得にネガティブな影響を及ぼす可能性も考えられる。

下位尺度の主効果以外では、すべての異文化接触の有無において主効果がみられ、異文化と接触しないほうがするよりも友人関係への動機づけが高いことが分かった。異文化の友人、同じクラス

や近隣住民に外国籍の人がいないことは、多様な文化を持つ他者が周囲に存在しないことなる。自己概念やアイデンティティを獲得するために、友人をはじめとした多様な他者との関係を形成し、自己のさまざまな側面に気づいて受容することが大きな意味を持っており、友人関係の動機づけも高まると考えられる。また、異文化と接触することで自己を成長させ、アイデンティティを確立させている他者を観察することが、自分にも同様の効果を期待して友人関係への動機づけを生じさせるといった一種のモデリングが働くことも推測される。さらに、異文化との接触によってステレオタイプは強められるが、異文化と接触しないことで多様な集団や他者への柔軟な対応が可能となり、友人関係への動機づけも高められることも考えられる。異文化と接触しないことは、このようなアイデンティティ獲得への動機づけや非ステレオタイプ的認知の形成に影響を及ぼすため、友人関係の動機づけを高めるのであろう。

これに対し、異文化との接触によって自己や他者の多様性が理解され、アイデンティティや自己概念にポジティブな影響を受けていることが実感される。そのため、友人をはじめとした現在の人間関係に満足し、さらなる友人関係への動機づけは低くなるのではないか。しかし、異文化コミュニケーションによってステレオタイプ、特に否定的なステレオタイプが形成される可能性もある。異文化の理解において、二項対立概念を用いて文化を比較し、相手の言動や行動の原因をこの概念や知識に帰する傾向があるため、ステレオタイプ的認知を助長することにもなる。このような認知傾向は、他者の多様な特徴を正確に理解し、把握できないことにつながるため、友人関係やそのコミュニケーションにもネガティブな影響を及ぼすであろう。また、異文化コミュニケーションは意識的配慮を活性化させるが、実際の異文化接触において相手への理解を深め、自分の意見を率直に伝える際にその困難さを感じることが推測される。意識的配慮は、異文化コミュニケーションだけでなく、他の友人関係においても重要な役割をもっている。異文化との接触を通してどのように意識的配慮を形成していくかが友人関係にも影響を及ぼすため、意識的配慮の形成や活性化の困難さを経験することは、友人関係への動機づけにネガティブな影響を及ぼすのではないか。

3）友人関係への満足感

友人関係への満足感について、2（接触の有無）×6（項目）の分散分析を行った結果、項目の主効果に有意差がみられ、「親友の存在」「友人からの理解」「友人からの受容」「気持ちの通じ合い」「友人からの支持」「友人全員からの好意」の順に高いことが明らかとなった。また、異文化接触の種類ごとに分散分析を行った結果、すべての異文化接触においても同様の結果が得られた。このことから、親友と呼べる友人や理解してくれる友人の存在が友人関係への満足感を高めるのに対し、友人全員から好意をもたれることは満足感にはつながりにくいことが考えられた。

「親友の存在」や「友人からの理解」で満足感が高かったのは、現代の青年が親しい友人と内面的に理解しあえることを求めており、そのような友人関係に対して満足を感じていることが考えられる。現代青年の友人関係は希薄な部分と親密な部分が混在しており（泉水・小池，2011ａ）、場面に応じて選択的に使い分けているといわれている（福重，2007）。また、「相手に気を使う」や「傷つけないようにする」といった「気遣い」、「冗談を言って笑わせる」や「楽しくなるように気を使う」といった「群れ」の傾向がある一方で、「真剣に話し合う」や「心を打ち明ける」といった「ふれあい回避」傾向は低いことも明らかとされている（泉水・小池，2011ａ）。つまり、現代の友人関係には表面的であるとともに内面的であることも必要とされており、これらの特徴を満たしていることがその満足感につながるのであろう。

これに対し、「友人全員からの好意」で満足感が低かったのは、現代における友人の定義や意味が従来のものとは変化していることが影響しているのではないか。いつも一緒に時間を過ごし、悩みや相談など深刻な話をするような相手だけでなく、あいさつをするだけの相手、何回か話したことがある相手、メールをするだけの相手なども、現代では友人と認知する傾向がある。つまり、従来は単なる「知り合い」としていた関係も友人として捉えるようになってきている。そのため、浅いつき合いでしかない相手を含めた友人全員から好かれることが必要とされず、友人関係において全員と親しい関係をもつことに価値を置かなくなってきたため、高い満足が生じないのではないか。これらは、現代では多くの相手と浅い表面的な関係を求めている一方で、深い内面的な関係をもつ少数の相手を求めていることを示唆しており、このような友人関係が満足感を高めるのであろう。

項目の主効果以外では、外国籍の友人と外国籍との同クラス経験、外国籍の近隣住民の有無において主効果がみられ、外国籍の友人がいるほうがいないよりも友人関係への満足感が高いのに対し、外国籍と同じクラスを経験しているほうがしていないよりも、近隣住民が存在するほうが存在しないよりも満足感が低いことが明らかとなった。このことから、接触する異文化との親密性が友人関係への満足感に影響することが考えられる。

外国籍の友人の存在は異文化との親密な接触であるのに対し、外国籍との同クラス経験や近隣住民の存在は異文化との希薄な接触であると思われる。前者における異文化との親密な関係やコミュニケーションは、自他の行動に関する信念にポジティブな影響を及ぼし、意識的配慮を活性化させる。このことが他の友人に対しても相手への理解を深め、自分の意見を率直に述べようとする動機づけを生じさせ、親密な関係の形成や維持に対してポジティブな影響を及ぼすため、友人関係への満足感も高くなると考えられる。

また、アイデンティティを獲得する過程では自己と身近な他者との比較を行うことが必要であり、それによって多面的な自己に気づき、多様な自己アイデンティティを理解していく。友人関係という異文化との親密な接触は、同じクラスや近隣住民といった希薄な接触と比べて相手が身近であるために、自己との比較を行うことが可能であることに加え、意識的配慮によって相手を深く理解しているため、正確な比較を行うことが可能である。このことから、外国籍の友人との接触は他の異文化接触に比べて社会的アイデンティティや多面的な自己アイデンティティの獲得につながることが推測され、友人関係への満足感を高めるのではないか。

さらに、異文化との接触によってステレオタイプ的認知が強められるとされているが、友人として親密な関係を築き、頻繁に接触することによって自分のもつステレオタイプに合わない特性を認知し、確認することが推測される。このことは、認知的バイアスを修正して正確な他者認知を可能にさせ、その動機づけを生じさせる。たとえば、友人との接触初期において、「気が合わなそうである」と感じていても、それが間違った印象である可能性もあるため、コミュニケーションを通して確認しようと動機づけられる。その結果、当初の印象とは異なり、相手が同じ考え方や価値観をもっていたということを経験することで、さらに正確な対人認知への動機づけが強められる。つまり、外国籍の友人との親密な関係は正確な対人認知への動機づけを高め、他の友人関係においても正確な対人認知を行うことを可能にするため、その関係の発展や維持にもポジティブな影響を及ぼし、満足感を高めるのではないか。このような正しい対人認知への動機づけは、現代社会に存在するアンビバレント・ステレオタイプを解消することにもなると思われる。アンビバレント・ステレ

オタイプは、現実社会に存在する異文化やその人びとに対する偏見や先入観に影響する要因の１つとされるが、自己の公平な世界観や社会規範に反するものでもある。外国籍の友人との親密な接触や関係は正しい対人認知を可能とし、アンビバレント・ステレオタイプを解消することにつながるため、公平な世界観をもつという動機づけが満たされ、友人関係への満足感も高くなるのではないだろうか。

５．全体的考察

本研究は、親族移民の有無、外国籍の友人の有無、外国籍との同クラス経験の有無、外国籍の近隣住民の有無といった異文化との接触が異文化受容態度に及ぼす影響について検討するとともに、友人関係への動機づけや満足感への影響について検討することを目的とした。

異文化受容態度については、異文化との関係や理解に対する積極的な関わりを促進させると同時に、日本や日本人のイメージを高めることが明らかとなった。このことから、日本において国際化の進んだ環境への居住が異文化受容態度を促進させることを証明するとともに、異文化との接触が社会的アイデンティティの認知や自己アイデンティティの獲得や公平な世界観の確認につながるため、異文化に対するポジティブな態度を形成することが考えられた。しかし、実際の現実社会には偏見や差別が存在しており、自分自身がもつ公平な世界観を維持しようとしてアンビバレント・ステレオタイプが存在する可能性も示唆された。また、外国籍の友人とより親密な関係は、そのコミュニケーションを通して意識的配慮を活性化することにつながり、自己概念やアイデンティティの獲得にポジティブな影響を及ぼすことが推測された。

友人関係の動機については、「笑い」や「群れ」によって友人関係を形成、維持し、アイデンティティを確認することがその動機となることに加え、友人関係においては独自の価値観をもつことが考えられた。国際化や多文化共生が進み、周囲に多様な他者が存在するために画一的な価値観を持つ必要がなくなったことが影響しているが、自己に対する他者の認知を気にしないことが社会的自己の確認やアイデンティティの獲得にネガティブな影響を及ぼすことも推測された。さらに、異文化と接触しないことによって、自己概念やアイデンティティの獲得のために多様な他者との関係をもつように動機づけられ、異文化接触によってアイデンティティを獲得した他者が代理強化として機能し、非ステレオタイプ的認知によって多様な集団や他者への柔軟に対応することになり、友人関係への動機づけを高めることが考えられた。一方で、異文化接触によってアイデンティティや自己概念の獲得にポジティブな影響を受けたと感じることや、異文化への否定的ステレオタイプや二項対立概念によって他者の正確な理解を難しくさせていることが、友人関係への動機づけにネガティブな影響を及ぼすと思われた。

友人関係への満足感については、現代の友人関係には表面的であるとともに内面的であることも必要とされているため、親友が存在し、友人から理解されることが満足感につながる一方で、現代では友人の定義や意味が変化し、以前は知り合いとしていた浅い表面的な関係も友人と認知するため、全員から好かれることは満足感につながらないことが考えられた。また、外国籍の友人の存在が友人関係への満足感を高めるのに対し、外国籍との同クラス経験や近隣住民の存在は友人関係への満足感を低めていることが明らかとなった。このことから、異文化との親密な関係やコミュニケーションは意識的配慮を活性化させて他の友人関係に対してもポジティブな影響を及ぼすことや、社会的アイデンティティや多面的な自己アイデンティティの獲得につながり、満足感を高めることが推測された。さらに、異文化との親密な接

触は正確な対人認知への動機づけを高め、正確な対人認知を可能にして関係の発展や維持にもポジティブな影響を及ぼし、公平な世界観を脅かすアンビバレント・ステレオタイプを解消するため、満足感が高まることが考えられた。

本研究では、異文化接触の有無によって異文化受容態度や友人関係への動機づけ、満足感について検討したが、人の行動はそれぞれがもつ態度によって影響されるため、異文化受容態度の高低が友人関係やその動機づけ、満足感に及ぼす影響について検討することが、今後の課題としてあげられる。このことは、異文化接触が異文化受容態度にどのように影響し、友人などを含めた対人認知や対人関係に影響を及ぼすのかを理解するために有効であろう。また、異文化への態度だけでなく、異文化をどのように理解しているかといった側面からも検討していくことも必要である。このことは、異文化との単なる接触ではなく、その理解が態度を形成し、友人関係などの行動に影響するといった過程を把握することを可能にするであろう。居住環境の国際化や多文化化が異文化への態度に影響するといわれており、出身地域や年齢などからも検討することも、異文化接触の潜在的な影響を検討するために有効であろう。

引用文献

Fisk, S.T., Cuddy, A., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.

福重　清（2007）．変わりゆく「親しさ」と「友だち」―現代の若者の人間関係―　高橋勇悦他（編）　現代日本の人間関係　団塊ジュニアからのアプローチ　学文社　pp. 27-61.

一二三朋子（2006）．異文化の友人・自他文化評価・自他の行動に関する信念が意識的配慮に与える影響―アジア系留学生及び日本人学生の場合―　筑波大学地域研究，**26**，27-44.

加藤　司（2001）．対人ストレス過程の検証　教育心理学研究，49，295-304.

松井　豊（1990）．友人関係の機能　齋藤耕二・菊池章夫（編）　社会化の心理学ハンドブック　川島書店　pp. 283-296.

水野将樹（2004）．青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか―グランデッド・セオリーアプローチによる仮説モデルの生成―　教育心理学研究，**52**，170-185.

向井有理子・渡部美穂子（2006）．異文化受容態度：日・独・英の比較　向井有理子・渡部美穂子（編）　比較文化研究―日本・ドイツ・イギリス―　都市文化研究センター

岡田　涼（2005）．友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討―自己決定理論の枠組みから―　パーソナリティ研究，**14**，101-112.

岡田　努（1999）．現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について　教育心理学研究，**47**，432-439.

泉水清志・小池庸生（2011a）．現代青年の友人関係に及ぼす要因　育英短期大学研究紀要，**28**，23-32.

泉水清志・小池庸生（2011b）．異文化接触と友人関係　日本心理学会第 75 回大会論文集

辻　大介（1999）．若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア　橋元良明・船津　衛（編）　子ども・青少年とコミュニケーション　北樹出版　pp.11-27.

渡部美穂子・金児暁嗣（2004）．都市は人の心と社会を疲弊させるか？　都市文化研究，**3**，97-117.

（2011年11月30日　受付
2012年１月12日　受理）